

2021年度GTセミナー GTサミット2021②

第244号 2021年11月1日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

GTサミット2021②

2021年10月19日、20日に「GTサミット2021」を
赤坂スターゲートプラザで開催し、Zoomでも同時配信しました。

全国から70施設を超えるお申し込みを頂き、これからの保育に
ついて学んでいきました。

(前号から引き続きGTサミット2021の講演録をお送りします)
本誌、第243号GTサミット2021も併せてご確認ください！

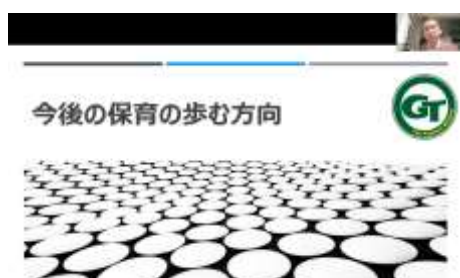
1日目 2021年10月19日(火)

13:30～ 講演 GT代表 藤森 平司「今後の保育の歩む方向」
15:30～ 休憩
16:00～ 講演 鈴木 寛様「これからの教育と幼児教育」

18:00 1日目終了

2日目 2021年10月20日(水)

9:30～ リレー講演
12:00～ 終了



（前号から引き続きGTサミット2021の講演録をお送りします）

—他のカリキュラムと「見守る保育」との違い—

次の質問ですね。各クラスの工夫はどのような効果を子どもにもたらすか。よく言われるんですけど、共同・自律、自由ということなんですけど、きちんとした子ども同士の関わりを持たせることによって、自由が身についてきます。例えば、行ってはいけないところに柵をします。次は、柵はやめるけど言葉で止めます。最後の3つ目は、自分で行かなくなる、これが自立。律するようになる。よく言われるんですけど、躰はどうするかということですが、1つは「躰」の漢字通りで身を美しくする。人への思いやりがある意味で、躰ということ。相手を不快にさせない、思いやりの態度が一つ。もう一つの意味が仕付け糸と言って、粗く縫う。仕付け糸を縫っておいて、形が出来たら糸を抜くと形が維持する。自分を律するようになることが最後です。これが自由ということ。自由は、自分のままにというのは自分を律して、やってはいけないことをやらない。うちの園はエレベーターがあるんですけど、監査が来ると、監査の人が危ないので電源を切って下さいと言われます。私は子どもたちが乗らないように、電源を切っているというと、子どもたちがそれを見て、「乗っちゃダメと口で言えばいいのに」と言われました。子どもからすると、そう言います。自分で律するようになることが、子どもたちに一つの効果をもたらします。「共同思考力」お互い助け合ったり、意見を出し合うことです。どういうことが期待されるかということ、投資の人たちが出してきたのが、モンテッソーリ、フレーベル、レッジョなどの違いを表にしてきました。そういうことをしてきた中で私は、大きな前提として他の教育法（モンテッソーリ教育）の違いはどこか。他の教育法で、市民権を得ている物との違いを教えて欲しいとありました。一覧表に7つくらい載っていましたが大きな違いは、すべて欧米の考え方を元にしてあります。多くはヨーロッパ。アメリカにしてもニュージーランドにしてももとは白人です。テファリキは先住民族のマオリ族の子育て観を使っていますので、世界中に広がることは少ないです。世界的な人口を見た時にアジアですが、この一覧表にないのはおかしいと思います。産業革命を含めた世界をリードしてきたのは欧米で、医術にしても、学問にしても西洋的な物が多くありました。それらがあったので、カリキュラムが西洋・欧米が多いです。アジアが最近見直されていますので、私がやりたい1つは、アジアからカリキュラムを作るべきという思いがあります。アジアから出す根拠かということ人類の進化から見ると、中央アフリカからホモサピエンスは出ています。一番近くて、住みやすく住んだのがヨーロッパ。アジアにはそのころ原人たちがいましたが、その後滅びました。ヨーロッパにいるけど、もっといいところあるかもと渡ってきた。好奇心とネオトニーと言って、幼形成熟と言いますが、幼さ。すぐにじゃれ合う、信じあう。好奇心が強いことを言うが、アジアの人たちは強く持っているそうです。そういうものがないとアジアまで来ません。日本に渡ってくるがハードルが高い。上からくるとすると極寒の地を超えないといけなく、下からだと海を渡らないといけなく。好奇心とかだけでは渡って来れない。渡った人は、好奇心と幼さとチームワークがよかったと言われています。広い意味で言ったら、これからのAI時代はヨーロッパが築いて来たものはAIに変えやすいですが、アジアの人たちが持っているものはAIに変えることは出来ない。協力や人と関わる力が、これからの時代必要になってくるだろう。それを反映したカリキュラムが必要だろう。モンテは教具を作りました。今は少しずつ変わってきていますが、当時欧米のカリキュラムは自立が中心で、一人一人はよく考えられていて、子どもの主体性は私たちが提案している保育と似ています。子どもの主体性や、自らやることは似ています

が、大きく違うのが子ども同士の関わり。共同思考力がモンテなどにはないですね。教具にしても、恩物にしても、共同の思考力で何かしていくことが違いです。私たちが提案している保育は、脳のセンシティブリティを見てわかるように、01歳の時から必要です。しかし、最近新しい中では0歳も考えられてきていますが、オリジナルは、乳児からは少ないです。3歳以上が中心ですね。オランダのイエナプランも考え方が似ていますが、4歳半以上とか、乳児からの考え方がないですね。欧米では託児やベビーシッター都下個人が世話をする考え方が強いです。そこが似ているところと違いだと思います。最近、モンテッソーリが打ち出そうとしているのが、藤井聡太やビルゲイツがモンテッソーリ教育を受けていますと宣伝しています。それに対して、「見守る保育」を受けた人で、有名な人がいますかと聞かれました。答えは当然困ります。うちの保護者に、卒園児に有名な人がいるか聞いたら、保護者は有名の考え方はどういうことですか？と聞かれた。本人が幸せに生きていたら、違うのかと言われた。それが考え方ですが、その時に例えば、OECDはエデュケーション2030を提案しています。2018年の時に小学校に入った子たちが2030年に世の中に出るときに、どんな力が必要かを小1から身につけないといけないと提案したものです。私たちの保育は、2030年に世の中に出る子たちに、幼児期に何を必要かを行っているので有名な人はいません、と言いました。これから来る時代を作る仕事ですから、逆を言えば過去のものではないかと言いました。少子社会ではない、人口が多い中で、これまでのカリキュラムで有名になっているわけで、今それをしても有名な人が出るかどうかはわからない。将来、大人になった時になるためにしているのだからと言いました。その前の一つ、子どもに何をもたらすかというときに、非認知能力の向上、幼児期の教育が認知的な物は短期的には効果はあるが、長期的には効果がないことが有名になったのがヘッグマンの研究です。乳幼児期に大切なものは、認知的な物以外と名付けられたのが非認知能力ということですが、まだまだ合意されていませんが、実は認知能力以外のものという言い方ですが、これが認知能力を否定しているわけではありません。OECDでは、コンピテンシーという言い方をしているが、学力以外の能力がどうも社会で活躍するためには必要ではないかという考え方を作った。これらを踏まえ、点数で計れないものですね。ということは私は、その中の計る力は難しいが共通するのは多くは、子ども同士の関係性から身につけるものだと思います。失敗してめげない力は、一人ではないが友達同士で取られたり、立ち上がるとか、身につけていたり、共感力もまさにそう。子ども同士がないと共感できないということ。それらを含めることは、非認知能力は子どもの関わりの中で身につくもの。それは乳児期から小学校に入るまでが多い。小学校に入ってから、学習に入る。学習に入るときに非認知能力が基盤にないと、学習がスムーズに伸びていかないのではないかと。学習するにあたって、失敗することも、くじけることも多い。協働して考えるときに、共感力がないといけないとか、学業が入った時の基盤になるのは、乳幼児期に育つのだと思います。仮に、異年齢間交流だとすると、どこでも実践可能なように思われるが、見守るならではのポイントは、質問に困った。何かというと、GTメンバーが何人もいる。それに対して、その園がどんなことをしたら見守る保育をした園と認めるのかと聞かれた。次の質問に関係するが、答えるのに困った。認定制度もないが、異年齢児交流が一つの特徴とした。まず、いろいろな話があるが、最近特に異年齢間交流の中で交流ではなく、異年齢保育が私が提案する特徴が分かってきた。1つがチーム保育もそうだが、特徴と思ったのとあまり聞いたことがないのが、皆さんなので幅広く説明をします。

本稿は、2021年10月19日に開催した「GTサミット2021」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)